

## 2010 年 IFTA ベルリン大会参加感想文

T&C フィナンシャルリサーチ、NTAA 理事 東野幸利氏

2010 年 IFTA 大会（第 22 回大会）に参加した東野幸利さんの大会参加感想文です。同大会は 2010 年 10 月 7 日（木）～9 日（土）までの 3 日間、ドイツのベルリンで開催されました。東野さんは同大会にスピーカーとして参加し、一目均衡表を使ったパターン分析とポジショニングについての講演を行い、好評価を得ました。

なお、東野さんが同大会の講演で使ったプレゼンテーション資料は、会員のページでご覧になれます。



# IFTA 23<sup>rd</sup> Annual Conference

The Ritz Carlton, Berlin • Berlin, Germany

October 7-9, 2010



## 2010 年 IFTA ベルリン大会に参加して

T&C フィナンシャルリサーチ

NTAA 理事

東野幸利

第 23 回 IFTA 総会が 2010 年 10 月 7～9 日までの 3 日間、ドイツ・ベルリンで行われました。私にとってベルリンは二度目。今回は 2006 年のルガノ大会以来のスピーカーで参加させていただき、二年前のパリ大会に一般参加した際にも、一人で立ち寄った場所です。

ベルリンはドイツ東部に位置し、ポーランドとの国境から 150 マイルに位置します。成田からベルリンへの直行便はなく、フランクフルト経由でベルリン国際空港のテーゲル空港へ。大会会場のリッツ・カートンホテルまではバス・地下鉄を乗り継ぎ、30 分程度はかかったと記憶しています。

リッツ・カートンはポツダム広場 (Potsdamer Platz) に立地しています。ポツダム広場は高層ビルが立ち並び、ビジネスマンや若者が多く、ベルリンのなかでもどちらかというところ新興都市。ベルリン映画祭のメイン会場にもなっているそうです。

一方、1989 年のベルリンの壁崩壊後の復興をアピールする場所にもなっており、街には



人々が探索、共有できる数多くの歴史的な文化遺産や名所がたくさんあります。

2 日目の夕方、空き時を使って、「ウンター・デン・リンデンの並木道」や「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人のための記念碑」、「ブランデンブルク門」、「国会議事堂」などを歩きましたが、「ブランデンブルク門」以外は真っ暗でよく観ることができませんでした。



大会への参加者総数は 121 名。内訳の属性では、ファンド・マネージャー 33.3%、機関投資家のトレーダー 26.7%、個人とレーダー 23.3%、機関投資家のアナリスト 20.0% (自己申告で複数回答可)、といった職種が多かったと聞いています。

大会 1 日目は恒例の“WALK ABOUT”からスタート。午後から始まる 3 日間のセッションでは、メインテーマの行動ファイナンスを始め、エネルギー市場のテクニカル分析、アルゴリズム取引、ポイント・アンド・フィギュア、ローソク足チャート、一目均衡表、デマークインディケータ、季節性分析、流動性分析など、ここまでバラエティに富んだ IFTA 大会はなかったのではないのでしょうか。FX



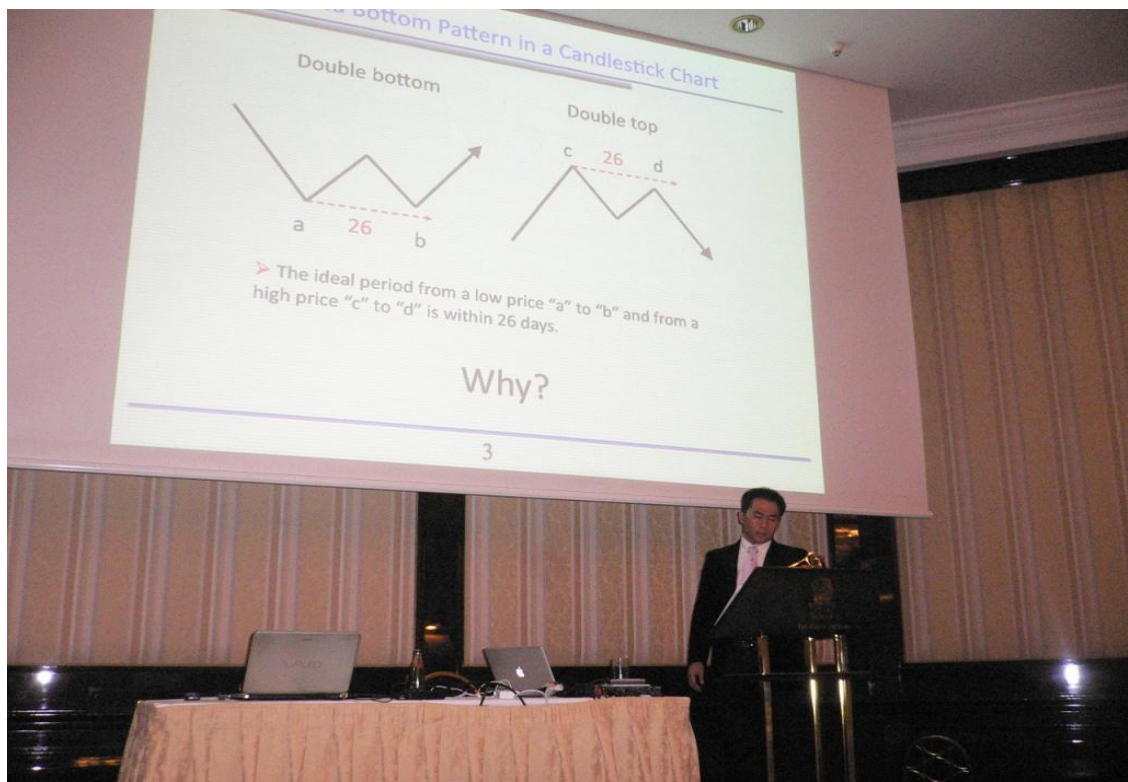


やコモディティ専門のテクニカルアナリストが多く、独自理論や発見、既存テクニックの検証など、なかにはかなり独創的な話もありました。

私のテーマは、「26 の基準線を使ったポジション乗せと時間的ロスカットのタイミング（一目均衡表）」。スピーチは 2 日目の夕方だったため、精神的には中途半端な余裕はあったのですが、やはり 1 日目に終えて、あとは聞く側にまわる方がよほど落なものです。

内容を簡単にご紹介しますと、相場で二番底や二番天井を形成するときに、二番底なら最初の安値から次の安値までの間にできる戻り高値があります。その戻り高値から 26 日以内に基準線を超えているか、超えていないか、その時間的な制約をもって、ロスカットのタイミングを図る、といった論文でした。ロンドンのテクニカルアナリスト、デビット・リントンによる「Clouds Chart（一目均衡表）」のスピーチのあとだったので、かなりやりづらかったことを覚えています。

しかし、一目均衡表の人気は変わらず外国人にも受けがいい。あまり複雑化しない欧米系のシグナルに対し、「日柄、抵抗帯、役、均衡点・・・」といった独特のニュアンスが神秘的に写るのでしょうか。「Clouds Chart（一目均衡表）」という著書も出版されていて、大会会場ではよく目に付きました。



欧州系の参加者が多かったのは当然なのですが、今回はインドネシアからの参加が 3 名、中国人も 2 名参加されていました。その中国人うちの 1 人は東京からの参加で、以前私が就職活動で外資系の投信会社の試験を受けたときの面接官だったのには驚きでした。大会を機に、東京に帰ったあともメールで交流を続けています。

私と本間さんのスピーチが終了したあと、あるドイツ人の女性が寄ってきて、一目均衡表の基本数値「9、17、26、33、42、・・・」の謎解きの話を始めるのです。それぞれの

数値が、どのような意味があるのかどうか？ 故佐々木英信先生の出筆された本をすべてその女性は日本語からドイツ語に翻訳した、ということらしいのです。一目均衡表の独自の表現や言い回しなどがどのように訳されたのか、今後どのように世界に伝わっていくのか興味深いところです。

また、中国人の参加者からは、「あなたの資料が欲しい」と最終日まで強く嘆願され、初日から頭痛に悩まされた私にとってのストレスになったことも思い出します。

大会最終日の夜のガラ・ディナーでは、ベルリン中心街にあるマイスターザールでの豪華な夕食会。主催国ドイツが次の年の主催国に大会を引き継ぐ簡単なセレモニー、親睦イベントなどが行なわれました。音楽ショーでは過去 100 年にわたりベルリンで聴かれた様々な人気音楽が演奏され、日本人があまり経験することがない、海外独特の雰囲気味わうことができました。

今回の収穫は海外で主流になりつつあるテクニックを確認できたことや、プレゼン能力の重要性。日本人の分析の方が思考性が高いように思いましたが、外国人のプレゼン能力は抜群です（当然すべてではありません）。

優れた内容でもプレゼン能力次第では随分と伝わり方が違います。わかりやすさや表現、展開力などが重要で、語学力に乏しい私でも何となく理解できる、普及や伝達の究極はそこにあるような気がしました。最近、人前で話すことが多くなった私にとっての最大の収穫だったかもしれません。

実務面でも新しい分析手法へのヒントやテクニカルアナリシス分野における自分の実力を再考する良い機会となりました。海外の人前でプレゼンをする経験を積めたこと、演台からみる海外参加者の目は頭のなかに映像として残っており、いつか役に立つときが来るでしょう。また、海外のテクニカルアナリストとのネットワーク作りも重要。大会参加者の一部のアナリストとは、SNS を通じて交流できるようになりました。

さて、来年の IFTA 総会はボスニア・ヘルツェゴビナの首都「サラエボ」です。毎年参加することはできませんが、また参加したいと思います。NTAA 会員の皆様、是非機会を作って一度参加してみてください。何かのきっかけになるとと思います。

3 日間というのは遠路遙々の日本人にとっては非常に短い時間ですが、私のなかでは一年 365 日のうちのメインイベントに近いものになりつつあります。初めて、カナダ・バンクーバー大会に参加したときに、「一度参加するとまた来たくなるよ」、といわれた当協会の江田さんの言葉を思い出します。バンクーバー大会に参加したのをきっかけに、私は銀行員から投資顧問会社のアナリストへ転職を決めました。

最後に大瀧理事長はじめ国際部長の本間さん、そして NTAA 関係者の皆様へ。今回、IFTA 大会を通じ、一生忘れることのない貴重な体験をさせていただいたことに、心から感激申し上げます。

以上